

若林正文 台湾研究の歩み



邱若龍畫

Wakabayashi Masahiro

若林正文

台湾研究の 歩み

P 2. 若林正文プロフィール

P 4. 『台湾研究序説』の構想 レジюме・資料

P 10. 『台湾研究序説』の構想 参考資料・主要参考文献

P 12. 若林正文の歩み

P 14. 若林本を読む

P 18. エッセイ① 孤独な登攀者へ

P 20. エッセイ② 台湾「選挙見物」のこと

P 22. エッセイ③ 泥縄式もまた愉し

P 24. 若林正文 略歴・著作・研究活動

P 26. 若林台湾学とは・「若林台湾学」の継承者たち



若林 正文

1949年長野県出身、1972年東京大学教養学部教養学科卒業、同大学院入学。1973年初訪台。東京大学助手として勤務した後、1983年『台湾抗日運動史研究』（研文出版／のち2001年に同社から増補版）を發表、1985年「台湾抗日運動史研究」で東京大学博士（社会学）。1986年には東京大学教養学部助教授、1992年に『台湾——分裂国家と民主化』（東京大学出版会）を發表、1996年には東京大学大学院総合文化研究科教授。1997年『蔣経国と李登輝』（岩波書店）などで、サントリー学芸賞。1998年には日本台湾学会を設立、初代理事長に就任。2008年『台湾の政治』（東京大学出版会、2021年に同社より増補新装版）發表、アジア・太平洋賞大賞及び樫山純三賞。2010年、東京大学退職、同大名譽教授。同年早稲田大学政治経済学術院教授、2012年早稲田大学台湾研究所所長を歴任。2018年日本国外務大臣表彰。2019年、中華民国政府「紫色大綬景星勳章」受章。2020年早稲田大学退職、同大名譽教授。同年には家永真幸との共編『台湾研究入門』（東京大学出版会）を出版、瑞宝中綬章受章。「若林台湾学」（許佩賢）とも称される卓越した観察、分析、構想力を通じて台湾の近現代史を貫く史観を確立、著作は学術界のみならず、日本、台湾などの政府外交機関における必読書とされている。

『台湾研究序説』の構想

—— 代わり変わる帝国と「台湾という来歴」 ——

若林正文

1 「台湾という来歴」のコンテキストを求めて
——『台湾研究序説』の構想

2 第Ⅰ層の視座：台湾歴史時空の磁場
：諸帝国の周縁と“方法的「帝国」主義”

3 第Ⅱ層の視座：台湾歴史時空の行動者
：原住民、外挿国家、漢人移民

4 第Ⅲ層の視座：台湾歴史時空における
周縁ダイナミズムの展開
【例示】諸帝国の「網」と「鑿」とが縊り出す
国家・社会関係のコンテキスト

5 結びに代えて

参考資料：図と表

主要参考文献リスト

1 「台湾という来歴」のコンテキストを求めて ——『台湾研究序説』の構想

I. 動機 ——なぜ『台湾という来歴』か？

- (1) 地域研究論としての基本的問い —— 「台湾とは何か」へのアプローチ
 - ① 国際関係論的手法：直近の時間幅(同時代、1 四半世紀くらい)での動向の密接観察・研究(1984年～、『台湾の政治』)
 - ② 国際関係史的手法：「○×」を「○×」たらしめている来歴=「○× という来歴」のコンテキストを求めるアプローチ(2016年～本講義)
- (2) 直感的動機 —— 「諸帝国の周縁を生き抜く」[若林, 2016]

☆台湾原住民の墓銘碑：四種の文字(漢字、ひらがな、カタカナ、ローマ字)・四種の名前(民族名、漢人名、日本名、キリスト教洗礼名)
- (3) 研究来歴上の動機 —— 研究関心の同心円の拡大
 - ① 後期抗日運動史研究：「台湾は日本と支那の二つに火の間に立つ」(矢内原忠雄『帝国主義下の台湾』)[若林, 1983 ; 2001]
 - ② 戦後政治(史)研究：米中「七二年体制」+「中華民国台湾化」論
→「台湾をその周縁に位置づけてきた諸帝国を遠望する歴史的視座」[若林, 2008]

II. 『台湾研究序説』の構想 —— 三層の視座 [図 1]

- (1) 第Ⅰ層の視座 = 台湾歴史時空の磁場：代わり変わる帝国への視座 = “方法的「帝国」主義” [若林, 2020]

* 2つの視角(「帝国の網」と「帝国の鑿」と)と7つ(3+4=7)の観点
- (2) 第Ⅱ層の視座 = 台湾歴史時空の行動者：原住民、外挿国家、漢人

* 外挿国家の行動論理の検討を中心に：可視化政策と秩序再編および基盤構造的く力>とその社会作用 [若林, 2022]
- (3) 第Ⅲ層の視座 = 台湾歴史時空における周縁ダイナミズムの展開
【例示】諸帝国の「網」と「鑿」とが縊り出す国家・社会関係のコンテキスト
 - ① 代わり変わる帝国と原漢複合性の展開
 - ② 代わり変わる帝国と可視化政策
 - ③ 代わり変わる帝国と土地所有
 - ④ 代わり変わる帝国と「議会政治の夢」
 - ⑤ 代わり変わる帝国と台湾の社会、国家、国民

☆さらにこれらに絡み合う法の継受と断裂(王泰升など)、資本主義化(矢内原など)、ナショナリズムの展開(Wu, Rwei-ren など)などのコンテキスト

2 第Ⅰ層：代わり変わる帝国への視角 —— “方法的「帝国」主義”

I. 「諸帝国の周縁を生き抜く」 —— 台湾史は世界史である

- (1) 「諸帝国の周縁」という歴史磁場 —— 周婉窈の概念図に「補助線」を引く

☆台湾歴史時空の行動主体：原住民族、移住漢人、外挿国家 [図 2. 「地理空間で歴史の空間を定義する」]
- (2) 台湾史は世界史である —— “方法的「帝国」主義”

☆台湾は諸帝国の一部に不均等に編入→諸帝国は台湾史の内部に入り込む * 主要な諸帝国の台湾外挿国家：清帝国の州県制官治機構；大日本帝国の台湾総督府 = 近代植民地国家；アメリカ非公式帝国庇護下の「台湾大」の中華民国(挫折した中華民国) ☆二つの視角：「帝国の網」(台湾への国家外挿の国際関係史)と「帝国の鑿」(諸帝国の外挿国家と社会(複数)の相互作用の歴史社会学)→“方法的「帝国」主義”

II. 「帝国の網」：台湾への国家外挿の国際関係史【3つの観点】

—— 東アジアにおける諸帝国の興亡と台湾島の地政学意義の顕在化

- (1) 「地理はモノを云う」=台湾島の地政学重要性の顕在化の局面
* 17世紀、19世紀後半、20世紀中葉、2010年代以降
- (2) 帝国支配の安定=「帝国の平和」の局面
* 「大清の平和」、「大日本帝国の平和」、「アメリカの平和」 * 「帝国の鑿」が自律的に作動する時空を担保
- (3) 諸帝国盛衰の世界史ダイナミズム=「台湾という来歴」の外部過程の局面
* 「X帝国の平和」の裏側の「Y帝国の勃興」、覇権のパワーの交代→台湾歴史の重大な岐路を準備

III. 「帝国の鑿」：諸帝国の外挿国家と社会の相互作用の歴史社会学

—— 代わり変わる帝国と周縁ダイナミズム 【4つの観点】

- (1) 変わる帝国の局面 —— 世界帝国、国民帝国、非公式帝国、新国民帝国
* それぞれの帝国の異なる世界史的位置・性格→異なる統治理性→異なるパワー投射の内容と方法
- (2) 代わる帝国の局面 —— 「幕間」の付随偶発性(contingency)と国家・社会関係のリセット過程
* 台湾における外挿国家形成の主要プロセス(清→日本の場合を念頭に)
 - ①主権の移譲 —— 条約、前帝国組織の撤退、統治資料の移譲
 - ②社会制圧の遂行 —— 組織的武装力による抵抗の排除
 - ③可視化政策の遂行 —— 国家が治安と財の流用のため人と人の組織および土地を判読可能なようにアレンジしようとする国家の意志と行動
 - ④現地統治組織の形成 —— 官治/自治の設定、協力者層の形成(社会指導層の取り込み)
- (3) 周縁ダイナミズムの局面 —— 国家・社会関係の経常的展開とその帰結
* 清帝国：原漢(原住民[先住民]と移住漢人)複合性の形成 * 日本植民地帝国：「議会政治無き海外版明治維新」(周婉窈)
* アメリカ非公式帝国+「台湾大」の中華民国：中華民国台湾化→意想外の「台湾国家/国民」の形成？
- (4) 台湾島の地政学意義の顕在化が国家・社会関係に影響する局面
—— 帝国の盛衰に巻き込まれる台湾 [参照：レジュメ 3-III-(3)]
* 清朝対台湾政策の大転換(1870-80年代) * 戦争動員(日本植民地統治期末) * 「中国要因」の作用と反作用の政治と米中関係の緊張(21世紀～)

3 第II層：台湾歴史時空の行動者：原住民、外挿国家、漢人 —— 外挿国家行動論理の検討を中心に

I. 台湾歴史時空の行動者

- (1) 原住民、国家、漢人移住者
- (2) 来ては去って行った漢人以外の植民者(オランダ人、日本人)

II. 「国家のように見る」(J.Scott) —— 可視化政策と秩序再編

☆可視化政策：調査/掌握、経常掌握(人籍・地籍移動掌握、統計制度等) →秩序再編(国家成員メンバーシップの整序、土地法制、財政秩序など国家の社会における制度基盤の形成) →派生的秩序再編(矢内原「資本主義化の基礎工事」、学校教育体系など) ☆可視化政策をめぐる相互戦略性：「上」に政策有れば、「下」に対策有り [表1. 可視化政策の内容：台湾史を念頭に(若林, 2022)]

III. 政治的〈力〉(国家権力)の社会作用と可視化政策

- (1) 基盤構造的〈力〉 —— 「社会を通じて作動する〈力〉」(M.Mann)
* 政治的〈力〉(political power)の2側面：[表2]
・ 基盤構造的〈力〉(infrastructural power)：社会を通じて作用する〈力〉
・ 専制的〈力〉(despotic power)：社会の上から作動する〈力〉
- (2) 「双方向に作動する〈力〉」と可視化政策 —— 一つの歴史社会学的想定
☆可視化政策を遂行する〈力〉：基盤構造的〈力〉
☆基盤構造的〈力〉の「社会統合作用」と「社会紛争誘発作用」
- (3) 政治的〈力〉作動の重層性 —— 政治的〈力〉の領域性とその地政学的側面
☆「諸帝国の周縁」の政治空間の台湾歴史時空にとっての重層性：台湾内空間、帝国内空間、帝国際空間

IV. 代わり変わる帝国と社会の行動者

- (1) 対清帝国州県制官治、郷治、「辺界」
* 官治：州県制(清帝国の外挿国家)の水平的拡大(「番界」の設定と東移)
* 郷治：漢人中間団体(豪族、郷紳、行郊など)
* 辺界の行動者と「下層能動性」(柯志明)：奸民、通事、熟番、番割・生番
- (2) 対台湾総督府から中華民国政府へ：国家の拡大と新たな行動者
* 台湾総督府(日本植民地帝国の外挿国家)による国家の水平的、垂直的拡大
* 「土着地主資産階級」(若林)≠「社会領導階層」(呉文星)、
* 資本主義的企業家(陳家豪)
* 限られた政治自由を行使するオポジション勢力(若林)
* 「理蕃」政策下のエリート(呉淑人)
* 長老教会(Ljavakaw)
* 台湾原住民族運動

4

第III層：台湾歴史時空における周縁ダイナミズムの展開【例示】

—— 諸帝国の「網」と「鑿」とが繰り出す国家・社会関係のコンテキスト

I. 代わり変わる帝国と原漢複合性の展開

- (1) 「ゾーミア」の誕生と縮小 —— 台湾への漢人移民と原漢複合性の形成
☆台湾島への国家外挿の開始、漢人開拓移住の開始、「ゾーミア[無国家地帯]」(J.Scott, 2009)の誕生
☆清帝国下の二重の原漢複合性：
 - ①行政的複合性：「番界」の形成と熟番地権の設定、「理蕃同知」の設置など：
 - ②政治的領域的な原漢複合性：「ゾーミア」の持続(域内非「版図」の放置)と「ゾーミア」の縮小：
漢人の「越界開墾」と「番界」の東移
- (2) 「ゾーミア」の消滅と国家の侵入 —— 「西欧の衝撃」下の「開山撫番」のバトンリレーと原漢複合性の転換
☆「画界封山」から「開山撫番」へ：ローヴァー号事件(1863)、牡丹社事件(1874)の衝撃→1875年以降、清朝による「ゾーミア」消滅軍事キャンペーンの挫折→日本による達成(「隘勇線の前進」→「五箇年理蕃事業」) ☆台湾総督府による「開山撫番」の引継ぎ：警察主体の「理蕃」体制の構築→清帝国下の政治的複合性の同一の政治的屋根の下の行政的複合性(政治的統合と行政的隔離)への転化 * 平原の行政的複合性消滅：平埔族に特別行政無し(戸口調査簿に身分記入のみ)

(3) 中華民国統治下の内部植民地主義

* 国家行政の浸透、山地「平地化」政策、山地保留地の土地調査・所有権付与、平地資本主義の来襲、キリスト教の広がり、「都市原住民」の形成

(4) 「台湾原住民族」の形成と原漢複合性の現在

- * 台湾原住民族運動と「台湾原住民族」アイデンティティの形成
- * 民主化後の中華民国憲法体制下での原住民族法制
- * 現行近代法体系と原住民族の慣習法体系・主体意識との相剋

II. 代わり変わる帝国と可視化政策

(1) 清帝国州県制政府の緩い可視化政策と「版図」形成 —— 州県制下の官治と郷治、請墾制、「番界」

- ☆ 鄭氏政権からの徴税台帳などの引継ぎ
- ☆ 州県制官治設置の際の土地丈量と戸口編査
- * 請墾制を通じた地籍・人籍の大まかな掌握
- * 背景としての「原額主義」の財政制度、地丁銀制度の開始
- ☆ 「番界」設定とその東移、「越界開墾」、「辺界」の「清丈賦課」：土地制度の変化は、一田二主制の族群的変種＝「熟番地権」（「番頭家」のみ）
- * 山地原住民族地域は「ゾーミア」として残る

(2) 台湾総督府による可視化政策と近代植民地国家の形成

- ☆ 清帝国州県制政府からの統治資料引継ぎは極めて不十分
- ☆ 平原・丘陵地域 —— 土地調査、戸口調査、人口センサス、「旧慣」調査、地図作製など
- ☆ 山地原住民族地域 —— 警察による「理蕃」行政→蕃人戸口簿、蕃族慣習調査、森林調査、地図作製→「蕃人所要地」の画定

(3) アメリカ非公式帝国と「台湾サイズ」の中華民国の形成 —— 「米援」、反共前哨基地強化、経済開発

- ☆ 台湾総督府可視化政策成果物の引継ぎの上に中華民国「戸政」、「地政」、「主計」制度の導入、米援を背景とした統計制度の再移植
- ☆ 「米援」・農復会を通じた資金・技術（航空測量等）支援：ex. 「農林辺際土地調査」（1953～58年）；「山地園芸資源調査」（1955～56年）など

III. 代わり変わる帝国と土地所有制 —— 諸帝国のバトンリレー

(1) 清帝国下の請墾制導入と一田両主制の形成

- ☆ 請墾制：清初鄭軍功武官の「田園囲い込み」に対抗し州県制官僚が推進
- ☆ 一田両主制（大租戸、小租戸、現耕佃人）：増大する漢人移住と開墾に適合、華南と似た複合的地権慣習の形成
- * 小農経営、小租戸地権の強化
- * 「熟番地権」の設定

(2) 清帝国統治末期台湾省巡撫劉銘傳の清賦事業

- ☆ 土地税制の手直し（「減四留六」）：小租戸を納税主体に〔南部を除く〕→小租戸地権のさらなる強化
- * 熟番地権の弱体化

(3) 日本植民地帝国統治初期台湾総督府の土地調査事業

- ☆ 西部平原：「隠田」の発見、一田両主制の解消、「業」の権利化、近代議会無き近代土地所有権の確立（矢内原：「資本主義基礎工事」の一環）
- * 熟番地権の消滅（←→平地における行政的原漢複合性の解消）
- ☆ 山地国有化、森林調査を経て「蕃人所要地」の画定

(4) 国民党政権による戦後農地改革と「山地保留地」政策

- ☆ 自作農の創出、地主層の弱体化
- * 本省人資産家層の取り込みと政治的無力化
- ☆ 「山地保留地」の土地調査・土地所有権の付与
- * 台湾原住民族運動の「我に土地を還せ」運動と「伝統領域」の問題

IV. 代わり変わる帝国と「議会政治の夢」—— 誕生、挫折、成就

(1) 植民地国家と「議会政治の夢」—— その誕生と挫折

- ☆ 可視化政策・秩序再編→国家の社会基盤制度の浸透（社会諸要素の国家の制度への囲い込み＝「協力者層」の形成）
- 「協力者」と浸透した国家制度との相互作用の拡大
- 「協力者層」の中に「意見ある人々」の登場
- 「意見を組織する人々」の形成 [参照：レジュメ 3-III-(2)]
- ☆ 近代的掌握・流用の制度には近代議会政治の論理（課税協議権：「代表無くして課税無し」）が潜在、総督府官僚もこれを承知
- * 参政権付与と結びつかなかった土地調査事業：cf. 沖縄県土地整理事業
- ☆ 「漸進的内地延長主義」の政治的吝嗇（1935年地方団体の「半自治」、1945年幼の国政参政権：女性参政権は戦後）
- 「議会政治無き海外版明治維新」（周婉窈）
- ☆ 「民主・自治の台湾」というビジョンの誕生：台湾議会設置請願運動（1921～34年）、台湾地方自治聯盟の運動（1930～37年）
- * 在台日本人：「血税（兵役義務）を納めずして参政権無し」←日本政府は植民地台湾への戸籍法（兵役義務とリンク）施行を拒否
- ☆ 「理蕃」統治：蕃童教育所、個別エリート育成と取り込み

(2) 東西冷戦下の国民党一党支配と「議会政治の夢」—— 挫折と成就

- ☆ 直裁・無遠慮な同化主義：「国語」、地方自治制度、男女普通選挙権付与（原住民にも：「山地郷」の設置）
- ☆ 非常体制下（「反乱鎮定動員時期」、長期戒厳令）の歪んだ「台湾議会」（省議会、「万年国会」）[1970年代初まで大陸選出議員が非改選で職務]
- * 選挙（地方選挙、国会増加定員選挙）を重要径路とした「分割払いの民主化」と「憲政改革」

V. 代わり変わる帝国と台湾の社会、国家、国民(nation) —— 積み重なる周縁ダイナミズム

(1) 「台湾という来歴」の外部過程の展開

- * 清帝国、日本植民地帝国、アメリカの非公式帝国、新中華帝国の台頭
- * 繰り返される台湾島の地政学的価値の顕在化と東アジアの緊張

(2) 周縁ダイナミズムの堆積と台湾の「社会」、「国家」、「国民」

- ① 清帝国下で「社会」ができた（完了＋持続）：漢人移墾社会の拡大と原漢複合性の形成
- ② 日本植民地帝国下で「国家」ができた：近代国家の社会基礎の植民地的形成
- ③ アメリカ非公式帝国庇護下の中華民国統治下で「国民」ができた：意外外の「台湾サイズ」の国家と国民の形成

(3) 「台湾という来歴」、「台湾という stake」

- ☆ 歴史的偶然（accidental Taiwan state）＋周縁ダイナミズムの堆積→強まる台湾の政治的主体性（unintended, late intended Taiwan nation）
- 高くなる諸帝国／外挿国家にとっての「台湾」という“stake”（強制併合のリスクとコスト、成功の場合の戦略的利益）
- [図3 台湾歴史における縦の入力（“stake”）と横の入力（若林作製）]

5

結びに代えて

- * 「序説」とは何か？ 何故今「序説」か？
- * 罪滅ぼしと罪作り

参考資料

図1 『台湾研究序説』の構想：三層の視点

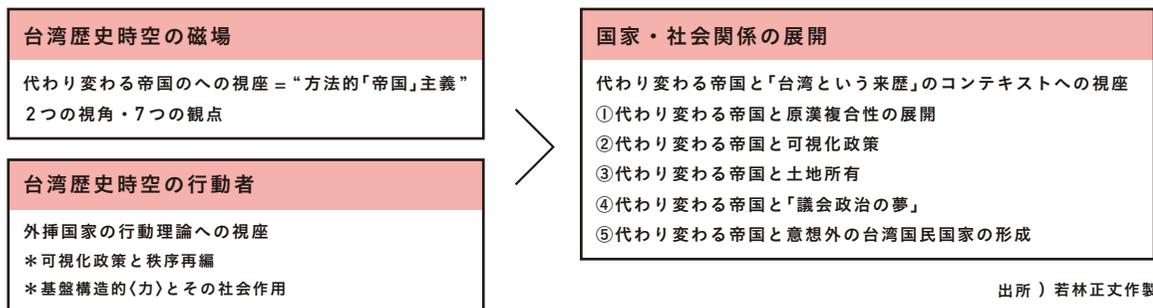


図2 周婉窈による概念図「地理空間で歴史の空間を定義する」(周婉窈 2016:7)

*台湾史の「時空」= 四角形 PQQ'P' (点は若林が付加)
*台湾史のアクター *A~E: 先住民 *F: 中国大陸からの漢人
*四角形 1~5: 「時代」又は「外挿国家」

1: 「オランダ東インド会社時代」 2: 「明鄭時代」
3: 「清朝統治時代」 4: 「日本統治時代」 5: 「国民党政府時代」

出所) 周婉窈『台湾歴史圖説』(第三版, 2016:7)

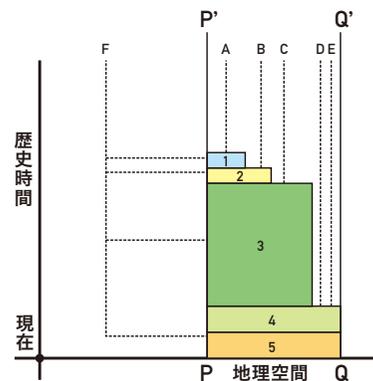
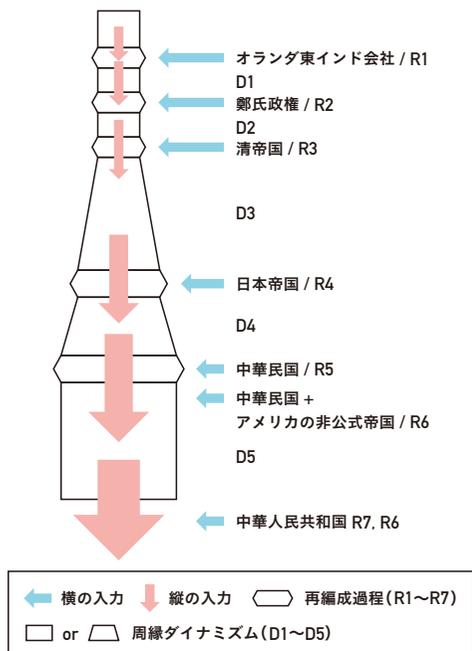


図3 台湾歴史における縦の入力(「賭け金」と横の入力(若林作製)



概念表1 可視化政策の対象

人を対象とする可視化政策	人籍	個人の 人の帰属・ 身分関係	訪問調査	台帳 (登録簿冊)	住民登録制度、 身分登録制度 (「戸籍」)	徴税、徴用、 徴兵、政治 (選挙)
	人口	集合として 見た人の 動向	センサス	台帳 (登録簿冊)	センサス 実施関連 関連法規	各種政策立案
	社会	文化、慣習、 産業	学術調査	調査報告書	調査実施 関連法規	(旧慣立法)、 司法(民事判決への 慣習法の援用)

概念表2 国家権力の二つの次元(対応する台湾歴史上の国家)

専制的(力)	基盤構造的(力)	
	弱い	強い
弱い	封建的(該当無し)	民主体制 (民主化後の中華民国台湾)
強い	帝國的(清帝国)	一党支配 (台湾総督府、国民党一党 支配時期の中華民国台湾)

出所) Mann(2008:357). Table 1. < >内は若林が付加

主要参考文献

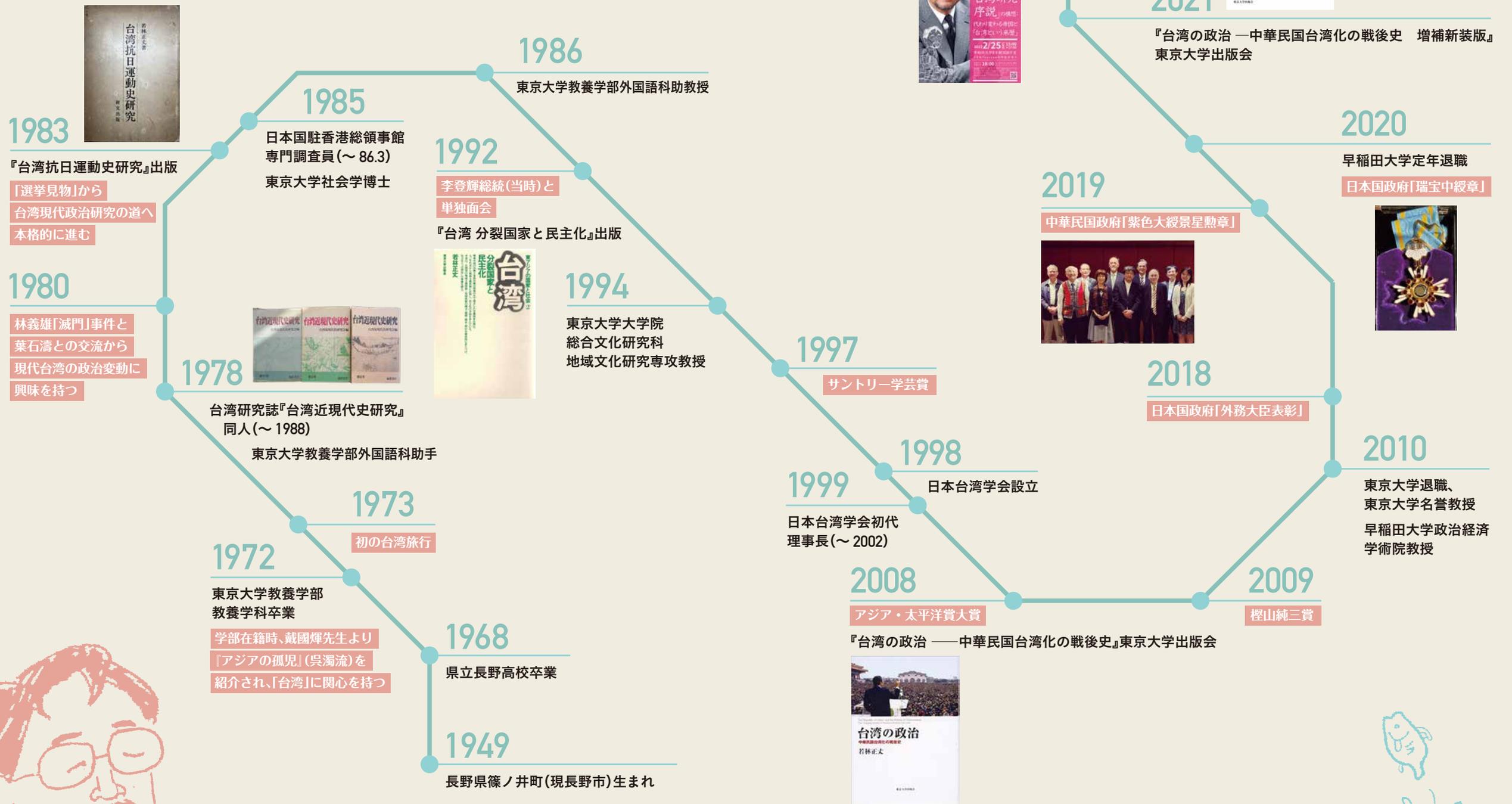
栗原純 1999 「台湾と日本の植民地支配」『岩波講座世界歴史第20巻』岩波書店
笹川裕史 2002 『中華民国農村土地行政史の研究』汲古書院
佐藤成基 2006 「国家の檻——マイケル・マンの国家論に関する若干の考察」『社会志林』(法政大学社会学部)53-2, 19-40
謝政徳 2011 「大正九年台湾地方制度の成立過程(一)——台湾総督府による地方政治改革事業を中心に」『阪大法学』60-6, 181-207
周頌 2022 「近代法と原住民の在来知の葛藤とその行方——Talun Suqluman 狩獵事案をめぐる憲法解釈から」『日本台湾学会報』24, 121-144
新田龍希 2020a 「統治構造——清朝から台湾総督府へ、国家・社会関係の転換」若林正文・家永真幸編『台湾研究入門』東京大学出版会
新田龍希 2020b 「植民地台湾の形成——清末・日本統治初期における国家・社会関係の転換」東京大学大学院総合文化研究科博士論文
松岡格 2014 「日本統治下台湾の身分登録と原住民——制度・分類・姓名」日本順益台湾原住民研究会編『台湾原住民研究の現在——接合される過去と現在』台北：順益台湾原住民博物館
松岡格 2015 「台湾原住民と姓名・住民登録・エスニシティ——可視化と公的書類と社会との関係研究」『マテニス・ウニヴェルサリス』獨協大学国際教養学部, 16-2
矢内原忠雄(若林正文編) 2001 『矢内原忠雄「帝国主義下の台湾」精読』岩波書店
林淑美 2017 『清代台湾移住社会の研究』汲古書院
林春吟 2012 『日本植民地期台湾の地図に関する研究——地図製作事業の検討を中心に』京都大学大学院人間・環境学研究科共生文明学専攻博士論文
林佩欣 2022 『支配と統計——台湾の統計システム(1945-1967)・総督府から国民党へ』ゆまに書房
若林正文 2016 「諸帝国の周縁を生き抜く——台湾史における辺境ダイナミズムと地域主体性」川喜田敦子・西芳美編著『歴史としてのレジリエンス』京都大学出版会(若林正文 2016 [許佩賢譯]〈在諸帝國周縁活下去：臺灣史中的「邊境動力」與地域主體性〉,《師大臺灣史學報》9)
若林正文 2020 「台湾という来歴」を求めて——方法的「帝国」主義試論」若林正文・家永真幸編『台湾研究入門』東京大学出版会
若林正文 2021 『台湾の政治 増補新装版』東京大学出版会
若林正文 2022 「可視化政策と秩序再編 再び「台湾という来歴」を求めて」『早大台湾研究所ワーキング・ペーパー・シリーズ 01』https://waseda-taiwan.com/activity/
柯志明 2021 『熟番與奸民——清代臺灣の治理部署與抗争政治』台北：中央研究院社會學研究所 / 臺大出版中心
邱士杰 2022 『劉進慶思想評傳——戰後臺灣經濟的左翼分析』台北：臺大出版中心
許佩賢 2010 「日治前期的學租整理與法制化過程」『師大臺灣史學報』3
許佩賢 2012 『太陽旗下の魔法學校——日治臺灣新式教育的誕生』新北：東村出版社
顧恆湛 2022 『再殖民、地縁政治與抵抗——戰後臺灣原住民的形塑(1945-1984)』台北：南天書局
吳敬人 2009 『臺灣原住民自治主義的意識型態根源——樂信・瓦旦與吾雅・雅達烏猶卡那政治思想初探』洪麗完主編『國家與原住民——亞太地區族群歷史研究』台北：中央研究院
吳豪人 2019 『「野蠻」的復權——臺灣原住民的轉型正義與現代法秩序的自我救贖』台北：春山出版
吳文星 1992 『日據時期台灣社會領導階層之研究』台北：正中書局
周婉窈 2019 『少年臺灣史(増訂版)』台北：玉山出版
周婉窈 2016 『臺灣歴史圖説(三版)』台北：聯經出版
曾文亮 2015 「日治初期台湾土地關係の整理及其影響、1895-1905」『成大歴史學報』49, 台南：成功大學歴史學系
蘇峯楠主編 2022 『看得見的台灣史 空間篇』台北：聯經出版
陳思宇 2011 「冷戦、國家建設與治理技術的轉變——戰後臺灣宏觀經濟治理體制的形成(1949-1973)」國立臺灣大學歴史學研究所博士論文
陳勇志 2000 『美援與台灣之森林保育(1950-1965)——美國與中華民國政府關係之個案研究』台北縣：稻鄉出版
鄭政誠 2005 『臺灣大調查——臨時臺灣舊慣調查會之研究』新北：博揚文化
姚人多 2001 「認識臺灣——知識・權力與日本在臺之殖民治理性」『臺灣社會研究季刊』42
李文良 2022 『契約與歷史——清代台灣的墾荒與民番地權』台北：臺大出版中心
林玉茹・詹素娟・陳志豪主編 2015 『紫線番界——臺灣田園分別墾禁圖說解讀』台北：中央研究院臺灣史研究所
林佩欣 2014 『臺灣總督府統計調査事業之研究』台北：花木蘭出版社
林文凱 2017 「臺灣近代統治性的歷史形構——晚清劉銘傳與日治初期後藤新平土地改革的比較」『臺灣史研究』24-4

Ljavakaw Sia, Ek-hong, 2018, "Crafting Aboriginal Nations in Taiwan: The Presbyterian Church and the Imagination of the Aboriginal National Subject," Asian Studies Review. https://doi.org/10.1080/10357823.2018.1444732
Mann, Michael 1984 "The autonomous power of the state: its origins, mechanisms and results," European Journal of Sociology, 25-2, pp.185-213
Mann, Michael 2008 "Infrastructural Power Revisited," Studies in Comparative International Development, 43, pp.353-365
Scott, James C., 1988, Seeing Like a State: How Certain Schemes to Improve the Human Condition Have Failed, New Haven: Yale University Press.
Scott, James C., 2009, The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia, New Haven: Yale University Press [佐藤仁監訳, 2013, 『ゾーミア—脱国家の世界史』みすず書房].
Wu, Mi-cha, 2017, "Launching the land revolution: Taiwan land survey in the early twentieth century," in Cheung, Sui-Wai ed., Colonial Administration and Land Reform in East Asia, New York: Routledge.
Wu, Rwei-Ren, 2004, "Fragment of f Empires: the Peripheral Formation of Taiwanese Nationalism," Social Science Japan, No.20.
Wu, Rwei-Ren, 2020, "Nation-State Formation at the Interface: The Case of Taiwan," Dunch, Ryan and Esarey, Ashley eds., Taiwan in Dynamic Transition: Nation Building and Democratization, Seattle: University of Washington Press.

Wakabayashi Masahiro

若林正文の歩み

NO AYUMI



台湾

— 分裂国家と民主化

東京大学出版会 1992年



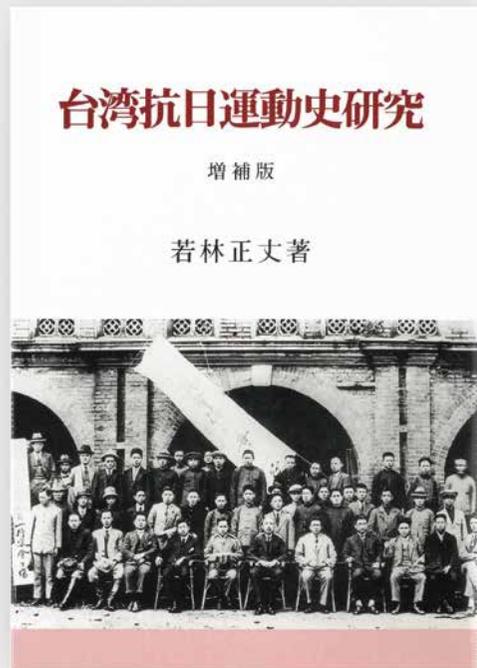
東アジアの国家と社会2 台湾

分裂国家と民主化

戦後中国の内戦と東海沿岸の環境の中で成立した分裂国家台湾は、七〇年代から権威主義体制に基盤し、民主化の方向を歩んでいる。本書は、台湾型の権威主義体制、党国体制の確立・展開、修正移行を歴史的背景として、民主化と台湾化の過程を探る。

若林正文

東京大学出版会



台湾抗日運動史研究

増補版

若林正文著



台湾抗日運動史研究

増補版

研文出版 1983年
研文出版 2001年

(前略) 1970年代に日本統治時代の台湾史を研究し始め、博士論文をまとめた若林は、1980年代に台湾を訪れた際、民主化直前の台湾社会にみまざる生命力に引き寄せられ、それから台湾現代政治研究へと方向転換した。そのため、「若林台湾学」の台湾史関係部分は主に1983年に出版した博士論文、およびそれに続く数篇の研究論文であり、これらはのちに2001年出版の『台湾抗日運動史研究 増補版』に収録されることになった。この著作における主な研究テーマは台湾議会設置請願運動、台中中学校設立運動、東宮行啓など、いずれも台湾史の中で重要な事件である。しかし若林はただの事件の経過を描写するに止まらず、いくつかの概念を提起しながら、それらの事件の「政治史」的な意義を描写しようと試みた。著作の中で提示した「台湾土着地主資産階級」、「磁場」、「待機」、「権威的捺印」、「巡礼圏」など、いずれも歴史研究ではあまり見かけない言葉ではあるものの、台湾史を解釈するにあたり、その背景として社会科学の基礎的概念を豊富に、また絶妙に活用し、大きな想像空間を開拓したと言える。ひょっとするとこの点にこそ「若林台湾学」の魅力があるのかもしれない。(中略)

若林は植民地台湾統治のメカニズムを三点にわたって指摘している。

一点目は、「交換・仲介を通じてコントロールするシステム」であり、対象はエリートである。その制度は、地方行政、諮問機関、専売政策など、手段は「レント (rent)」の分配であり、その目標はエリートの協力を仰ぐこと、並びにそのことを通じて非エリートをも服従あるいは黙従

させることであった。

二点目は、「規律・訓練を通じてコントロールするシステム」であり、対象はすべての民衆であり、とりわけ戦略上は学校の児童と学生に主要な位置が与えられる。制度は学校教育、保甲制度など、手段は皇族の巡視、各種儀式、運動会などであり、その目標は「臣民」を作り出し、さらに従順ならしめることであった。

三点目は「懲罰・威嚇を通じてコントロールするシステム」であり、これも対象はすべての民衆である。制度は軍隊、警察、監獄など、手段は刑罰の執行、目標は治安の維持であった。

日本の台湾統治はいかにして成立したのか、これはいうまでもなく近代台湾政治史の重要な研究課題であるが、若林の提示した三つの統治メカニズムはまさに異なる側面からこの課題に答えようとするものであった。(後略)

「台湾における『若林台湾学』の受容」若林正文・家永真幸編『台湾研究入門』東京大学出版会、2020年、pp.327-342収録。

許佩賢 (国立台湾師範大学) 評

戦前、戦後を問わず日本と台湾はきわめて密接な関係にあったにもかかわらず、日本においてはイデオロギー的偏向を排除した現代台湾政治研究が長い間ほとんどなされなかった。本書は、比較政治学のアプローチを借りて行なわれた現代台湾政治史の日本人による初めての研究書であり、長期にわたる研究の空白を埋める待望の書である。

著者の若林正文氏は、1980年代前半には、主として日本植民地時代の台湾近代史を中心に研究・著述活動を行っていたが、その後は主として戦後時代の台湾現代史研究および現代政治研究に携わり、現在、日本における現代台湾研究の第一人者である。(中略)

著者はまず、本書の視角として、権威主義体制民主化の政治社会学と台湾を巡る国家と社会の歴史社会学を提起している。そして、独自の分析枠組である「台湾型権威主義体制」を「台湾社会に対する孤立を米国の支持とクライアンティリズムの機制で補いつつ存続してきた疑似レーニン主義パーティ・ステイト」と定義づけている。この台湾型の権威主義体制が、外部正統性(米国の支持)の縮小に伴い内部正統性(台湾住民の支持)獲得のため、その体制の修正を始め、最後には民主主義体制への移行を始めるというのが著者の枠組である。(中略)

著者は代表作の『台湾抗日運動史研究』以来、社会への介入ないし浸透を試みる国家に対して、社会がどのようにして抵抗を試み、あるいはそれに挫折してきたかに関してきわめて透徹した分析を行なっている。本書においてもそれは遺憾なく発揮されており、特に特務の暴

走によりタカ派が躓き、その間隙を縫って党外勢力が伸長していく過程の分析は実に見事である。(中略)

著者の議論は手堅く包括的であり、評者も本書から多くを学んだ。本書は現代台湾政治および中国政治の研究者にとって必読書であり、本書に刺激を受けて台湾研究、中国研究がより進展することが期待される。

日本貿易振興機構アジア経済研究所学術情報センター編『アジア経済』第34巻第10号、1993年、pp.82-85掲載

松田康博 (東京大学) 評

台湾研究入門

東京大学出版会 2020年



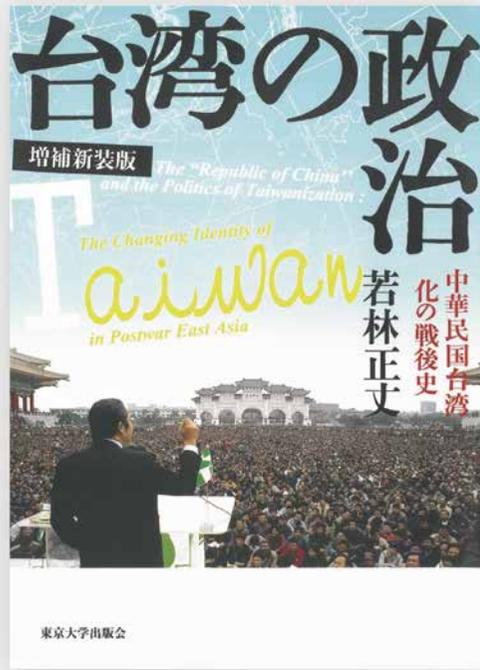
台湾研究はまさに学術的な研究となった。そして、「帝国の学知」と「主体性構築に学知」との間の葛藤を克服すべく、多くの試みや活動がなされてきた。若林はその中心に居続け、そこから生み出された成果や課題が日台双方、あるいはより広い空間に共有されている。それは「台湾という来歴」を求める営為でありながら、もしかしたら「台湾という来歴」の一部になっている営為なのかもしれないと感じさせられた。(中略)

以上、評者として本書に対する批評めいたことを述べてきたが、(中略)若林の言う「相互理解の学知」であること、あるいはそうなること、は決して容易ではない。対象としての輪郭は常に揺れ動き、台湾の主体性構築といっても、その主体性も多様であったりする。台湾に接することは、様々な帝国を意識するだけでなく、ディシプリンの挑戦することでもある。自らが常に問われるこの研究領域それ自体と、それにまつわる諸問題にどれだけ自覚的でいられるか、と言うことが「相互理解の学知」に近づく第一歩だと感じた。

日本台湾学会『日本台湾学会報』編集委員会編『日本台湾学会報』第23号、2021年、pp.248-254掲載

『台湾抗日運動史研究』『台湾——分裂国家と民主化』、『台湾研究入門』に寄せられた書評については一部を抜粋しています。いずれも著者の同意を得て転載しております。

川島真（東京大学）評



は誰なのか、台湾は台湾という国家なのか、という問いは大きな政治的争点として残されているのである。

NPO法人日本台湾教育支援研究者ネットワーク(SNET台湾)総括・企画『臺灣書旅～台湾を知るためのブックガイド～』台北駐日経済文化代表処台湾文化センター発行、株式会社紀伊國屋書店企画・制作、2021年、p.66掲載

家永真幸（東京女子大学）評

本書は、台湾研究の入門書として編まれている。諸帝国の周縁(あるいは断片)としての台湾を台湾たらしめているもの、台湾の来歴を明らかにしていくことが台湾研究であり、その台湾研究は諸ディシプリンが明らかにした来歴の重なりであるのみならず、隣接領域へと広がる開放性という厄介な(しんどい)性格を有するというのが本書の立場だ。(中略)

そして、台湾を約五十年間植民地統治し、その台湾に関する学知を蓄積してきた日本における台湾研究という本書の立ち位置は、以下のようなものだ。それは、台湾における「主体性構築の学知」の興隆という現状、また台湾がその地政学的重要性から新たな「帝国」からの挑戦を受け、新たな「帝国の学知」に晒されていく可能性に直面しているという状況下で、むしろかつての「帝国の学知」を踏まえつつもそれを相対化し、台湾における「主体性構築の学知」と向き合い、「相互理解の学知」となってきた、あるいはそうあるべき日本の台湾研究の意義と可能性を大切にしていけばいい、とのメッセージ孕んだものということになるだろう。(中略)

評(編者注: 許佩賢)が論じている「台湾における『若林台湾学』」の内容にしても、本書の執筆者を構成する若林の東京大学、早稲田大学時代の学生たちの陣容それ自体が、日本における「台湾研究」のありよう、その到達点、常に対象に対して奮闘する研究者のありようなどを示しているのではないか、ということである。この30年近くの間、台湾研究関連の博士論文が数多く提出され、書籍として刊行され、台

台湾の政治

増補新装版——中華民国台湾化の戦後史

東京大学出版会 2021年

本書は台湾政治研究を志す者にとって基本中の基本書として知られるが、専門家を目指すのでなくとも、広く戦後台湾政治に関心を持つ読者であれば座右に備えておいて決して損のない1冊である。台湾政治の歩みをめぐる膨大な量の情報が、日本における台湾研究の開拓者である著者の深い知見と洞察にもとづき体系化されて論じられていることから、現時点での通史の決定版としての価値はもちろん、何か知りたいと思ったときに最初に開くべき事典としての機能もあわせ持っている。

現在台湾を統治している政府は、かつて中国大陸で内戦に敗れて移転してきた政府であり、いまま中華民国という国号を名乗っている。しかし、いまや台湾政府と呼んだほうがしっくりくる実質を有し、国際社会でもそのように振る舞っている。それは誰が見ても明らかだが、本書の価値は、中華民国はどのような意味で、どのような範囲で「台湾化」したのかについて、厳密を期して通史を論じていることにある。具体的には、著者は「中華民国の台湾化」を(a)政権エリートの台湾化、(b)政治権力の正統性の台湾化、(c)国民統合イデオロギーの台湾化、(d)国家体制の台湾化、という4つの視角に腑分けする。この見取り図のおかげで、私たちは、(a)や(b)の側面での台湾化は1970年代の蔣経国の時代以降大きく進んだ一方で、(c)や(d)の側面での台湾化は紆余曲折を経ながらも模索途上にあるのだと整理して理解することができる。言い換えるならば、いまや台湾では中国大陸出身者ではなく台湾出身者が政権の中枢で活躍するようになり、中国大陸ではなく台湾の民意が台湾の政治を動かすようになった一方で、台湾人と

孤独な登攀者へ

2001年度地域文化研究専攻ガイダンスでの挨拶

近年はあまり人の口の端にのぼらなくなりましたが、一九五〇年代に東大総長をされた方に矢内原忠雄という人がいます。戦前日本の社会科学書の古典の一つとされる『帝国主義下の台湾』という名著を書いた学者であり、また内村鑑三の流れを引く無教会主義のキリスト者であり、日中戦争の開始とともにその軍国主義批判の言論ゆえに東大を追われた自由主義者でもあります。戦後東大に復帰し、一九四九年の新制大学制度とともにこのキャンパスに教養学部が新設されると初代学部長も務められました。

この矢内原教授は実は戦前の東大の経済学部において「植民政策」という講座を担当していました。「植民政策学」というのは読んで字の如く、植民地統治のためのテクノロジーを考究するものですが、わたしは、矢内原教授という人は自身がアカデミズムにおいて担っていたところの「植民政策学」をその内部から換骨奪胎して、今日につながる意味での地域研究、かれの場合は社会科学的地域研究を生み出した学者である、『帝国主義下の台湾』はその誕生を告げる書物である、と評価しているのですが、それはさておき、その矢内原先生に「富士登山」と題する短い文章があります。先生が東大総長在任中に東大山岳部員が富士山で遭難し十一人のパーティー中五名が死亡する事故がありました。遭難

の現場にはその後慰霊碑が立てられました。矢内原先生は一度その場の上って学生の霊を慰めたいと願っていましたが、総長在任中は果たせず、総長退任後、東大山岳部員やOBのエスコートにより富士に登り、その念願を果たされました。矢内原教授六十五歳の時です。この小文はそのときのことを綴ったものです。少し長いのですが、その一節を今引用したいと思います。

「同行の青年たちは強健で、熟練した山岳部のエキスパートぞろいであつた。私の前に二人、後に三人、一列縦隊で登って行く。私が息苦しくて立ち止まると、前後ともにビタリと止る。私が足を運ぶと、皆動き出す。全然私のペースに合せて、全員が行動する。誰もほとんど口をきかない。私がのろくて、三歩進んで立ちどまり、半歩動いてはまた止っても、誰も何とも言わない。叱ることもなく、呟くこともなく、笑うこともなく、さりとて励ますこともなく、言葉をもっても手をもっても助けることをしない。私が動けなくなれば、かついで行くつもりであることは確かであるが、登り始めてから下山した後まで、私にむかって誰一人、「ひまがかかった」とか、「大変だったでしょう」とか、批評する者も、いたわってくれる者もなく、彼らは黙々として私を守護し、その務めを果たした後黙々として去って往つた。」

私は自分の仕事で資料読みをしていて、二週間ほど前にこの小文に接したのですが、この一節に目にするに至ってただちに胸に浮かんできたのは、自分の学生が博士論文の執筆に取り組んでいるのを見守るときの心持でした。もちろん、この時の矢内原先生を若き学徒に見立てるのは無理がありますが、私の心に浮かんできたはそういう表層的なアナロジーではなく、いうまでもなく精神的情景としてのアナロジーであります。

皆さんと我々は、もちろん組織としてまたシステムとして指導するもの・指導されるものという関係に立ちます。われわれがシステムとして皆さんにどう対し、また皆さんにどう振舞ってもらいたいと考えているかは、わたくしの次に、研究科委員の木村先生がガイダンス資料の説明としてお話くださいます。しかし、またわれわれは一人一人の学者として新たに学問の道に入られたかたがたの歩みを見守るものでもあります。もちろん、システムの担い手として、したがって個々の学生のアカデミック・アドバイザーとして、われわれは言葉をもつて励ますことも、時にしかることも、また諸君を批評することもあるでしょう。それはまたわれわれの義務でもあります。

しかし、心の持ち方としてわれわれは学問という山に登攀する皆さんを伴走しつつ見守るものでしかありません。いまさら言うまでもありませんが、山に登るのは皆さん自身であります。矢内原先生は、先ほどの引用に続けて、「私は孤独を感じた。孤独はきびしいが、また安らぎであると感じた」と書いておられます。諸君は孤独であります。学問という大きな山脈において孤独ではありませんが、皆さんが個々にのぼるその山においては自分の足で歩むしかない孤独な登攀者であります。われわれは矢内原先生に伴走した山岳部員のように、それぞれのエキスパティーズをもって皆さんを見守りたい。われわれの力には限りがあり、指導することになるすべての人の山頂にまで伴走することはできないでしょう。われわれは学者として自分でもそれぞれ山に登りつつあり、いったん自分の山を降りて昨年はAさんの山に登り、また今年はBさんの山に登り、奔命に疲れるでしょう。しかし、われわれは八合目なり、九合目なり、諸君が山頂にいたのを見届けられる処まで登って、諸君が山頂に立つ英姿を眺めたいと願うものです。諸君の英姿を眺めることはわれわれの無上のよろこびであります。

東京大学大学院総合文化研究科 地域文化研究専攻主任 若林正文



台湾「選挙見物」のこと

このほど東京大学出版会より上梓した『台湾 分裂国家と民主化』（東アジアの国家と社会2）のあとがきに「選挙を見にいった台北、台南、高雄、宜蘭、桃園、屏東、板橋などの町の街頭は、筆者にとっての政治学の教室であり、民主主義の補習学校でもあった」と記した。奇異に思われる方もおられるかと思うが、これは、この十年ほどの私の現代台湾政治研究の舞台裏を要約したつもりであった。

一九七〇年代末から八〇年代初めにかけての数年は、台湾の国民党政権にとって複合する危機の時期であった。台湾の「中華民国」は米中国交樹立とともに米国と断交、米華防衛条約は失効した。これと同時に、中国はいわゆる「平和統一」攻勢を強化し、経済的には第二次石油ショックがあった。こうした危機を背景に、新たに登場してきた「党外」と呼ばれる民主化勢力と国民党政権との摩擦が頻発する。一九八〇年二月、七年ぶり再訪した時、台湾はまさにこの危機の中にあった。前年末に国民党政権が「党外」勢力を一網打尽にしようとする、いわゆる「美麗島事件」が勃発したばかりで、私の滞在中の二月二八日には、いわゆる「林義雄省議員家滅門事件」が起こった。民主化勢力のリーダーの一人で、「美麗島事件」で逮捕され収監されていた林義雄台湾省議会議員の留守宅に白昼、賊が押し入り、同議員の母と娘が殺害された事件である。この日は、現代台湾史最大の歴史的悲劇である「二二八事件」が三三年前に起こったまさにその日であった。それまで私は台湾の日本統治期の歴史を研究しており、同時代台湾についての理解は乏しかったが、この時たまたま台湾に居合わせ、この林家母子殺害事件が台湾の社会を襲った衝撃、事件とともに台湾社会を覆った悲傷感、ひしひしと肌に伝わってきた。そこには、経済的繁栄の陰で、なおも現代史の中で深く傷ついている社会があったのである。

だが、今から振り返れば、空気が動いただけでヒリヒリするよ

うな生々しい傷痕を抱えながらも、その痛みを逆にエネルギーとしていってしまうような活力が、この時すでに台湾政治の表舞台に台頭してきていたことがわかる。それが最も顕著に現れたのが、選挙、そしていわゆる「党外」雑誌・書籍であった。この頃から、台湾を旅行した友人や台湾からの留学生から、台湾の選挙が独特の熱気を帯びた興味深いものであること、当局の発禁処分などといったごっこをしながら、民主化勢力が雑誌や書籍を発行し、選挙時には支持者はそれらを購入して支援していることなどが、伝わってきた。一九五〇年代からの地方公職選挙に加えて、七〇年代初めからは、国民党政権の大陸時代に選出した議員は非改選のまま現職に止まるという奇形的なものながら国会の部分定期改選も実施されるようになっていたのである。

八〇年の久し振りの訪台を通じて眼前に現れてきたこうした光景は、たいへんな吸引力があって、歴史研究を続けていた私を落ち着かなくさせた。そして、八三年末、ついに意を決して、国民大会代表と立法院議員のいわゆる「増加定員選挙」を見にでかけ、帰国後おそるおそるある報道週刊誌に筆名で一文をものした。これが、私の台湾「選挙見物」の始まりであった。以後、これまで、八五年の地方公職選挙、八六年の立法院選挙、八九年の国民大会代表、立法院、地方公職同時選挙、九一年の第二期国民大会代表選挙と、重要選挙には「欠席」していない。新聞を読み、「党外」雑誌を読み、選挙の時は出掛けて行って街頭に立ち、次第に増えていく友人たちと、台湾の政治と社会について語りあうこと、これが、私の台湾政治研究の欠かせないフィールドワークであった。

台湾の権威主義体制下においては、長期戒厳令と稠密な特務機構による監視により、自由な政治的意見の表明は抑圧されていた。そこで相対的に自由な選挙という限られた時空目掛けて抑えられていた政治的エネルギーが殺到する。台湾の選挙の独特の活気はそこに生まれた。また、戒厳令解除前の時期、台湾の選挙が「民

主假期」、つまり「民主のための祝祭日」と呼ばれた所以もそこにあったのだが、「選挙見物」を繰り返すと、こうした選挙を挙行することの体制側の利益、つまり、鬱屈する政治エネルギーを定期的に安全にガス抜きしながら圧倒的多数の議席を確保して、民意の承認を得たと弁証する根拠を調達していくという、統治技術としての側面もまた見えてきた。

台湾の知人・友人が増えると、台湾本省人にはいわば「台湾本位」の視座、台湾を中国とは別の実体としてとらえる見方があることに今更ながらに気がつかざるを得なかった。それは特に反対運動に従事したりシムパシイを持つ人々においては牢固としたものがあった。これは、漢族＝中国人＝中国ナショナリズムの当然の担い手＝「一つの中国」に賛成、という公式を半ば飲み込んでいた私の台湾認識枠組みにとっては当初は一つの衝撃であった。だが、実際に、「党外」勢力の運動においても、戒厳令解除、国会全面改選などの自由化、民主化要求と「台湾前途の住民自決」から戒厳令解除実現後の政治舞台に公然化する「台湾独立」の主張とは結びついていたのである。私は、そこで、「台湾ナショナリズム」の概念を台湾政治分析に導入せざるを得なかった。「台湾国民」という政治共同体とその上に立つ「台湾国家」の存在は未だ不明であるにせよ、その確立を夢見るナショナリズムの存在は、現代台湾政治の確固たる現実であった。なぜ、この漢族が多数を占める台湾の地に、すでに国際社会では正統の地位を得た中国ナショナリズムとはことなるナショナリズムが存在するのか——これは、政治体制論だけでは解けない問題であり、何らかの歴史的視座が必要であった。前述の自著において、その現代台湾政治論のアプローチを「権威主義体制の民主化の政治社会学」と「台湾をめぐる国家と社会の歴史社会学」の二重の視角によるものと銘打つに至った所以である。

ところで、便利な統治技術としての「増加定員選挙」は、中央

東京大学教養学部助教授・台湾研究 若林正文

レベルに政治競争の道を開いたものではあったが、その一方で一九四〇年代の中国大陆で共産党との内戦中に選出された議員が非改選でそのまま職権を行使し続けるという明らかな不合理があった。一九八〇年代前半の民主化のテーマは「党禁」（新規政党結成禁止）の打破＝野党結成であったが、それが、八六年秋の民主進歩党結成で実現して以後われわれが眼にしたのは、「台湾独立」の主張が台湾舞台の表面におどり出て「国体」（ナショナル・アイデンティティ）の問題が公然たる政治的争点になっていく過程であるとともに、この不合理な国会の解体＝国会全面改選に向けて登り詰めていく政局であった。

その結果、非改選老議員の全面退職が九一年末に実現、同時期に行われた第二期国民大会代表選挙から、国会の全面改選がスタートすることになった。全面改選は、一九九二年末の立法院選挙で完成する。そして、九四年には、台湾省主席、台北市長、高雄市長など、これまで選挙に開放されなかった重要首長職の選挙が行われ、九五年には、何らかの形式で、総統（大統領）の公選が実現するはずである。これらの選挙においては、これまでのような政治的道具（在野勢力にとっては体制に挑戦する道具、体制にとっては権力維持の道具）としての性格は相当に後退し、政治権力をめぐる競争を決着させる正統な制度としての性格がより前面に出てくる。これらの選挙は、新たなルールで政権人事編成を行い、政治諸勢力の分布を決めることにより過去の体制から訣別していくという、「出発選挙」（founding elections）の意義を帯びることになる。

「移行」（transition）期政治過程の最大の特徴は、不確実性である。したがって、その間の政治過程が民主化であったかどうかは、厳密に言えば事後的にのみ確認される。私の台湾「選挙見物」も、その「出発選挙」の最後のラウンドまでは、続けなくてはなるまい。

泥縄式もまた愉し

台湾政治を地域研究として見ること

台湾近現代史・台湾政治論 若林正文

民主化からアイデンティティーの政治へ

去る六月に『台湾の政治——中華民国台湾化の戦後史』を東京大学出版会から上梓した。一九七〇年代から現在までのいわば長い「四半世紀」の台湾の政治構造変動を、「中華民国台湾化」をキーワードとして、その前提となる歴史的条件も含めて論じた。戦後の台湾海峡を挟んだ中台の対峙の中で、台湾では中国国民党政権の一元支配に支えられる「中華民国」が全中国を代表する正統中国であるとの虚構が政治構造に実体化されていた。中華民国台湾化とは、この虚構が取り除かれていく政治構造変動である。

この本は、私としては一九九二年刊の『台湾 分裂国家と民主化』（東京大学出版会）に次ぐ二冊目の現代台湾政治論の専著である。一冊目から二冊目へ問題関心の移動については、二冊目の序章の末尾に記したが、手取り取り早くは両著の副題、特に英文書名の「Democratization in a Divided Country」と“The Changing Identity of Taiwan in Postwar East Asia”を比べていただくと判然と思う。そのほか、この本の執筆の経緯や思い浮かぶ感想や今後の台湾政治研究の課題などについても、前書きや後書きにそれぞれ記した。ただ、実際に二冊目が物理的に「本」の形となって手に取れるようになってみると、あらためて思い浮かぶこと、繰り返し記してみたいことも出てきた。

「選挙見物」はおもしろい

私の大学院入学は一九七二年でその時から台湾を研究対象としていたから、考えてみれば前記の「長い四半世紀」は、自分の台湾研究の継続期間とほぼ等しい。

ただ、八〇年代中頃までは、主として日本植民地時代の歴史の研究をしていた（博士論文の表題は「台湾抗日運動史研究」である。同題で一九八三年研文出版刊、二〇〇一年増補版刊）。しかし、七〇年代末から台湾政治では外部の目にも観察できる新しい胎動が現れ、私はそちらに強く関心を引かれ、しだいに研究の軸足を移していった。そのために二つのことをした。一つは、新聞や雑誌などの政治報道のいわばメタ・データを知ることである。自分が生まれ育った社会ではない、戦前の事をいくらか知ったからそれで戦後のこともわかるわけでもない。だから報道に現れる情報の背景あるいはコンテクストにまで首を突っ込まなければ、目の前で上演されている事柄の意味はつかめない。そこで、台湾の戦後史や政治制度に関する文章を読みあさり（といっても、今日に比べれば無いに等しい数だった）、選挙ごとに出かけていってはその独特の雰囲気に入り、できるだけ多くの人に会って彼らの感覚と政府見解やメディア報道との距離を探った。

余談だが、私は日本の学界では、台湾の選挙実施観察（私は「選挙見物」と称した）の草分けではないかと思う。これは、おもしろくてたまらなかった。おもしろいからその後参入する人も増え、あっという間に私の専売特許でなくなり、それどころか、ずいぶんと用意周到にやる人も現れて、いつの間にか私はこうした学者の後をついていくことになった。

泥縄式もまた愉し

もう一つはディシプリンからの吸取である。前もって政治学など必要な社会科学の十分な訓練があって政治研究に軸足を移したというわけではない。先に台湾の政治の動きに関心を引かれたから、必要なことは後から「仕入れた」、つまりは泥縄式であり、いといと取りである。非民主的で非共産主義の政治体制に関して「権威主義体制」という用語があることも、当初は知らなかった。また、民主化に関しては、比較政治学では政治体制転換をめぐる議論が盛行し、八〇年代にはすでに「転換学」(transitionology)という擲論を込めた呼称が生まれるほどであったことも、後から知った。台湾で野党民进党が結成される頃に、著名な O' Donnell and Schmitter の Transition from Authoritarianism の訳書（真柄秀子・井戸正伸訳『民主化の比較政治学』未来社）が出て、帰宅の電車の中で台湾の事実を引きつけながら読みふけるうちに乗換駅を間違えたことをまだ覚えている。

さらに、八〇年代末からアイデンティティー政治が本格的に登場し、ナショナル・アイデンティティーをめぐる政治的対抗と外省人（一九四九年国民党の中国内戦敗北と前後して来台・定住した人々）対本省人（戦前にすでに台湾に定着していた人々）の歴史的わだかまりをめぐる所謂「省籍矛盾」とが、形成途上の政党政治や選挙政治とのやっかいな結合の様相を明確にし始めると、ナショナリズムの知識社会学、エスニシティの政治学といった領域にも親しむ必要が出てきた。また、これらとは一応別の文脈で台湾の先住民族の復権運動が始まり、漢族系住民の中の少数派である客家人の文化運動も開始され、これらに対する政策的応答が現実に出されるようになると、多文化主義をめぐる議論なども翳らなければならなくなった。まさに泥縄式に接ぐ泥縄式で、広がっていく台湾政治の現実に応答していったと言える。

ただ、幸いに政治的自由化とともに台湾現地の学界で、これらのディシプリンと台湾の現実を結合させて解釈を試みる学者が登場するようになった。私の研究に関して言えば、前著に到る研究活動の過程で知り合った呉乃徳、王甫昌、張茂桂などの研究に教えてもらうところが大きかった。また、さらに、台湾政治の構造変動のベクトルが台湾をめぐる国際環境と摩擦を起こすようにな

ると、これをより広くかつ縦深のある歴史的視座の中で見ていく必要が生じた。この点では、山本吉宣のアメリカ帝国システム論（同『「帝国」の国際政治学』東信堂、二〇〇六年）、呉淑人の「連続・重層的殖民」の視点から台湾政治史をとらえる議論などに啓発された。

これらの「学恩」あるいは「学縁」のおかげで、個別問題領域での理論と現実の対話作業にかかる精力・時間を節約し（それがあっても十全にできたかどうかは怪しいが）、私自身は、これらの変化をどう統合的に把握していったらよいか、に集中していくことができた。「中華民国台湾化」という視角はその成果である。それぞれのディシプリンの担い手から見たら、これは顔をしかめたくなるような所業なのであろう。彼らから見れば一定の一貫性を備えた理論の一部や用語のみを借りるなどは論外であり、また、現実の事例に応用されたなら必ず理論にフィードバックされるべきものであろう。ただ、地域研究から言うともそれほどでもないかもしれない。地域の個性を鋭角的に把握すべく、諸ディシプリンや隣接・関連分野、関連事例の間を右往左往するのは当然だからである。地域研究の政治研究というものがあるとするれば、結果的に私の泥縄式の存外ある種の王道を歩んだことになるのではないかとも思うのだが、いかがであろうか。

同時代史を書くということの興奮と心細さ

先に触れたように、中華民国台湾化の「長い四半世紀」は、私の台湾研究の「長い四半世紀」でもあった。ということは、結局私はこの本で台湾政治の同時代史を試みたことになる。

幕末から五五年体制までの日本政治史を上梓された後に升味準之輔教授が、現代史を叙述することは那須与一が波間に揺れる小舟の上の扇を射んとするがごときものだとの趣旨を「UP」に書いておられたと記憶する。二冊目の前書きにも別の言い方で触れたのだが、僥越ながら私も同じような感じを持った。揺れる小舟の小さな扇のそばまで矢を飛ばすのは射手の技量だろう。だが、的である扇に矢が当たるのはほとんど偶然だろう。同時代史を書くということは、書き進む間も現実が進行しているという事態をあえて引き受けるということである。書き進むには、いくら直近のものであっても、過去から今日に向かうベクトルを想定する必要があるだろう。理想的にはそれが那須与一の矢であってほしい。

だが、書き進む間にも現実も進行する。そこでは、著者が想定したベクトルでは説明のつかない事柄が起こってしまうかもしれないし、その事柄が新しいベクトルの起点になっていないとも限らない。本の上梓まで時間が限られている著者は、その新しいベクトルを感知できるのか？ 感知できたとしてそれを書き表すこと

ができるのか？

だが、弓を引き絞らなければ矢に力は生まれず、狙いを定めなければ矢に方向は生まれず、放たなければ矢が的に当たることも外れることもない。過去から現在に何らかの線を引かなければベクトルは方向を持つことができず、直近の現実であってもそのベクトルに位置づけなければ、ベクトルの有効性はわからない。心細い限りである。

『台湾の政治』は、今年の六月初めの店頭発売を目指した。五月三十一日には、私も設立に参加した日本台湾学会が設立十周年記念の学術大会を私の職場である東大駒場キャンパスで開催することになっていた。担当編集者によれば三月末に初校ゲラの校正が終わっていたればその場に何冊かはお披露目が間に合うという。私はそれを強く願った。しかし、三月二日には台湾政治の一大イベントであり、その先行きに大きく影響する総統選挙があった。編集者からは、あらかじめある程度書いておいて初校ゲラを作り、結果を見て直ちにそれに加筆・修正できるなら、三月下旬の総統選挙までが書き込めるし、是非そうしてほしいと要請され、私もそうすべきだと思い、初校ゲラを抱えて台湾に総統選挙ウォッチングに出かけた。

総統選挙に先立って一月には立法院選挙が行われて、与党民进党が前台北市長の馬英九を看板にした国民党に大敗しており、総統選挙でも国民党の馬英九の当選がほぼ間違いないものと思われた。ただ、私が懸念したのは、事柄の表面的結果が予期の範囲内のものであったとしても、現実にも結果が出た後には思わぬ形でそのことの意味が観察者の眼前に立ち現れてくる、そういうイベントもあるということである。民主制下の国政選挙というものは多かれ少なかれそういうものであり、だからこそ八〇年代初めからせっせと台湾の「選挙見物」に出かけた。そして、二〇〇〇年の政権交代から八年後、二度目の政権交代をもたらすであろう総統選挙というのは、まさしくその最たるものだと思われた。

ただ、正直言えば、もちろん、当時の心境は心細いというばかりではなかった。自分自身が引いたベクトルを用意して同時代の節目となるだろうイベントを眼前に見守っていられることにいささか興奮も覚えたし、その選挙の結果がまだ刊行されてもいない自分の本にどのような運命を用意するのだろうかと考えながら結果を待つのもスリリングなものであったのである。とはいえ、懸念は『台湾の政治』上梓後も残っていて、まだ矢をつがえているのだという緊張感、矢の向きが正しいのだろうかという焦燥、そしてもろもろの心細さもなかなか心中から去ってはいかないようだ。

若林正文 略歴・著作・研究活動

略 歴

1949	長野県篠ノ井町(現長野市)生まれ
1968	県立長野高校卒業
1972	東京大学教養学部教養学科卒
1974	東京大学大学院社会学研究科国際関係論コース修了、同博士課程進学 修士論文「台湾共産党研究——コミンテルンと台湾革命」
1978	東京大学教養学部外国語科助手
1985	東京大学社会学博士 博士論文『台湾抗日運動史研究』
1985.1～1986.3	日本国駐香港総領事館専門調査員
1986	東京大学教養学部外国語科助教授
1987	東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻助教授兼任
1994	東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻教授
1998	日本台湾学会設立、臨時理事会理事長
1999～2002	日本台湾学会第一期・第二期理事長
2010.3	東京大学退職・東京大学名誉教授
2010.4	早稲田大学政治経済学術院教授
2012	早稲田大学台湾研究所所長
2020.3	早稲田大学定年退職、早稲田大学名誉教授、早稲田大学台湾研究所顧問

研究・学術活動

1973.2～3	初めて台湾旅行
1978～1988	台湾研究誌『台湾近現代史研究』同人
1980.2～3	美麗島事件直後の台湾再訪
1982.7	交流協会主催学術交流活動で訪台
1983.12	初めての選挙観察で訪台(「立法院叛乱鎮定時期増加定員選挙」)
1996.5～1996.3	台湾・中央研究院民族学研究所訪問者として研究滞在
1998	日本台湾学会設立・臨時理事会理事長
1999～2002	日本台湾学会第一期・第二期理事長
2003～2006	科研費研究代表「基盤研究A: 脱植民地化諸地域における政治と思想—日本植民地主義と西欧植民地主義の比較と国際環境」東京大学
2007～2009	科研費研究代表「基盤研究B: 地域研究における「地域」の可塑性と重層性に関する比較研究」東京大学
2006.4～6	台湾国立政治大学台湾史研究所客員教授として研究滞在
2012～2014	科研費研究代表「基盤研究B: 台湾政治における反対党の誕生: 国際体制・孤立国家・市民社会とナショナリズム」早稲田大学
2015～2017	科研費研究代表「基盤研究B: 台湾政治体制移行期の民主進歩党: 「改革型」民主化とナショナリズムの相克」早稲田大学

受賞・受勲など

1994	大平正芳記念財団環太平洋学術研究助成: 研究テーマ「民主体制の誕生—台湾における政党政治の生成」
1997	サントリー学芸賞(政治・経済部門): 受賞作『台湾——分裂国家と民主化』『蔣経国と李登輝』
2008	アジア・太平洋賞大賞: 受賞作『台湾の政治——中華民国台湾化の戦後史』
2009	樺山純三賞: 受賞作『台湾の政治——中華民国台湾化の戦後史』
2018	日本国外務省「外務大臣表彰」
2019	中華民国政府「紫色大綬星勲章」
2020	日本国政府「瑞宝中綬章」

主要著作

単書	1983 『台湾抗日運動史研究』研文出版
1985 『海峡——台湾政治への視座』研文出版	
1989 『転形期の台湾——「脱内戦化」の政治』田端書店<中文版、台北: 故郷出版、1989年>	
1992 『台湾——分裂国家と民主化』東京大学出版会<中文版、台北: 月旦出版社、1994年>	
1997 『蔣経国と李登輝——大陸「国家」からの離陸?』岩波書店<中文版、賴香吟譯、台北: 遠流出版社、1998年>	
1997 『台湾の台湾語人・中国語人・日本語人——台湾人の夢と現実』朝日新聞(朝日選書)	
2001 『台湾抗日運動史研究——増補版』研文出版<中文版、台湾史日文史料典籍研讀會譯、台北: 播種者出版、2007年>	
2001 『台湾——変容し躊躇するアイデンティティ』筑摩書房(ちくま新書)	
2008 『台湾の政治——中華民国台湾化の戦後史』東京大学出版会<中文版、洪郁如・陳培豊等譯<戦後台湾政治史 中華民国台湾化の歷程>、台北: 台大出版中心、2014年>	
2020 <<台湾抗日運動史研究(全新增補版)>>新北: 大家出版社	
2021 『台湾の政治——中華民国台湾化の戦後史 増補新装版』東京大学出版会(「補論『中華民国在台湾』から『中華民国台湾』へ——中国の影響力メカニズムと中華民国台湾化の現在」)	
共著	1980 (春山明哲と共著)『日本植民地主義の政治的展開 一八九五—一九三四年』アジア政経学会
編著	1987 『台湾——転換期の政治と経済』田畑書店
1995 (谷垣真理子と共編)『原典中国現代史 第7巻 台湾・香港・華人』岩波書店	
2001 『矢内原忠雄「帝国主義下の台湾」精読』岩波書店	
2010 『ポスト民主化期の台湾政治——陳水扁政権の8年』IDE-JETRO アジア経済研究所	
2014 『現代台湾政治を読み解く』研文出版	
2020 (家永真幸と共編)『台湾研究入門』東京大学出版会	

単著未所収の主な論文及び英文論文

1990	「The Imperial Visit of the Crown Prince to Taiwan in 1923: How the Japanese Colonial Authorities Managed the Tour,」Journal of the Japan-Netherlands Institute, Vol. II (Papers of the Dutch-Japanese Symposium on the History of Dutch and Japanese Expansion in Memory of the Late Nagazumi Akira)
1994	「Two Nationalisms concerning Taiwan: A Historical Retrospect and Prospects」in Wu, Jausieh Joseph ed., Divided Nations: The Experience of Germany, Korea, and China, Taipei: Institute of International Relations, National Chengchi University
2001	「『過去の清算』—台湾二・二八事件と族群和解」船橋洋一編著『日本の戦争責任をどう考えるか 歴史和解ワークショップからの報告』朝日新聞社<2003, "Overcoming the Difficult Past: Rectification of the 2-28 Incident and the Politics of Reconciliation in Taiwan," in Yoichi Funabashi ed, Reconciliation in the Asia Pacific, Washington: United States Institute of Peace Press>
2004	「台湾ナショナリズムと『忘れ得ぬ他者』」『思想』第957号、岩波書店<2005 "Taiwanese Nationalism and the 'Unforgettable Others,'" in Edward Friedman ed., China's Rise, Taiwan's Dilemmas and International Peace, New York: M.E. Sharp>
2006	「A Perspective on Studies of Taiwanese Political History: Reconsidering the Postwar Japanese Historiography of Japanese Colonial Rule in Taiwan,」in Liao Ping-hui and David Der-wei Wang eds., Taiwan under Japanese Colonial Rule, 1895-1945: History, Culture, Memory, New York: Columbia University Press
2008	「Democratization and Ethno-politics in Taiwan: A Tentative Interpretation of the 'New Party Phenomenon' and 'Song Chuyu Phenomenon」in Shiraiishi Takashi and Pasuk Phongpaichit eds., The Rise of Middle Classes in Southeast Asia, Kyoto University Press
2008	「試論: 日本植民帝国『脱植民地化』の諸相——戦後日本・東アジア関係史への一視角」黄自進主編『東亞世界中的日本政治社会特徴』台北: 中央研究院人文社会科学研究中心亞太区域研究專題中心
2015	「康寧祥と『党外』の黎明」『日本台湾学会報』第17号 日本台湾学会
2016	「諸帝国の周縁を生き抜く 台湾史における辺境ダイナミズムと地域主体性」川喜田敦子・西芳美編『歴史としてのレジリエンス—戦争・独立・災害』京都大学出版会<中文訳、許佩賢譯、<師大台湾史學報>9, 台北: 國立台灣師範大學台灣史研究所、2016年>
2017	「<研究動向>「台湾島史」論から「諸帝国の断片」論へ—市民的ナショナリズムの台湾史論一瞥」『思想』1119、岩波書店

その他

1989	(吳密察との対談録)『台湾對話録』台北: 自立晚報文化出版部
2020	張隆志・劉夏如主編(吳密察との対談録)『台湾對話録(1989-2020)』台北: 玉山社
2019.4～2022.9	「私の台湾研究人生」(繁体字版「我的台湾研究人生」)1-30, nippon.com 不定期連載

若林台湾学とは

台湾で「若林正丈」といえば、まず連想されるのは「中華民国台湾化」という言葉である。これは若林が1992年に出版した『台湾——分裂国家と民主化』（東京大学出版会1992年）の中で提起した概念であり、次いで2008年に出版した『台湾の政治—中華民国台湾化の戦後史』（東京大学出版会2008年）では本のタイトルにも用いたものである。この言葉は広く台湾の研究者に受け入れられ、現在ではすでに戦後台湾の政治発展を分析する際の鍵概念になっている。若林が早期におこなった日本統治時代の台湾史研究も、その後めざましい発展を見せる台湾の台湾史研究に多くの啓発を与え、「中華民国台湾化」のように台湾史理解に役立つ鍵となる概念を数多く提示してきた。よって、「若林台湾学」は、「（日本統治時代）台湾史」と「台湾現代政治」の少なくとも大きく二つに分けることができる。

許佩賢「台湾における「若林台湾学」の受容」若林正丈・家永真幸編『台湾研究入門』
東京大学出版会2020年、p.327

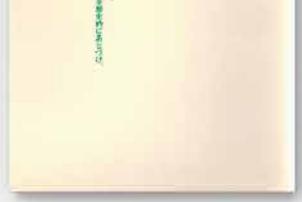
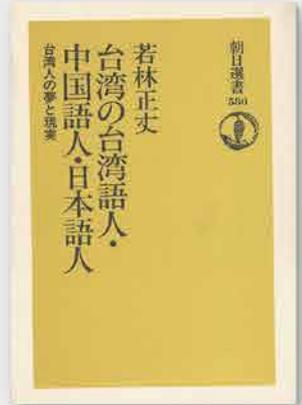


「若林台湾学」の継承者たち

1997年から若林ゼミと呉密察ゼミのメンバーを中心として「日台青年台湾史研究者交流会議」を開催することになり、2002年からは「東アジア近代史青年研究者交流会議」へと拡大した。2004年までに台湾や日本各地で合計7回の交流会議を開催し、その成果として2冊の論文集を出版した。交流会議開催の背景には2人の先生の思いがあった。台湾史研究が発展し始めてからすでに一定の時間が経ったものの、若い研究者にとって決して発表の機会が数多くある訳ではなく、また国際交流の機会もほとんどないので、協働してこのような発表と交流の場所を設けよう、ということになったわけである。その後、会議の規模は徐々に広がりを見せ、台湾史研究にかかわる若い世代の国際的な視野を広げている。その時期から現在にいたるまで、若林は台湾史青年研究者の国際交流に継続的に尽力し、さらに日本に留学して台湾史を専攻する多くの大学院生を育ててきた。筆者を含めて、当時交流会議に参加した大学院生や若林ゼミで博士学位を取得したゼミ生は、現在では台湾や日本の各大学や研究機構で職に就いているが、どんな研究テーマであるにせよ、事実上みな全て「若林台湾学」の継承者といえる。

許佩賢「台湾における「若林台湾学」の受容」若林正丈・家永真幸編『台湾研究入門』
東京大学出版会2020年、p.330





若林正文 台湾研究の歩み
2023年2月25日 発行

編集：早稲田大学台湾研究所
発行：早稲田大学台湾研究所
表紙イラスト原案：邱若龍
表紙・本文デザイン：100KG
印刷：株式会社シナノパブリッシングプレス

©早稲田大学台湾研究所
禁無断転載

